

演題：日雇い労働者のいのちと出会って
(平成 25 年 11 月 8 日 入佐 明美 先生)

大阪市西成区の「あいりん地区」のことは、これまでも日雇い労働者に関するニュースやドキュメント番組などで知っていましたが、大阪に 10 年以上も暮らしていながら、「釜ヶ崎」という地名は今回初めて知りました。そこで、入佐先生の講演を前に、先生の著書『地下足袋の詩』を読むことにしました。

そこには、単に釜ヶ崎地区の日雇い労働者の苛酷な実情だけではなく、彼らと入佐先生の心の交流やそこで日々、入佐先生が何を思い、何を考え、ボランティア・ケースワーカーとして活動されているかが書かれていました。読後、先生がどのような講演をされるのか、大いに興味がわきました。

先生の講演では、いくつもの胸を打つキーワードが散りばめられていました。

先生は、路上生活者がアパートに住めるようにお金を貸し、生活保護の受給に必要な手続を手伝ってあげる過程で、どのようなアパートに住みたいかといった希望を詳細にわたり訊くこととしているそうです。そうすることで、自分の希望を口にする、自ら選択できることの喜びを実感し、「私」を主語にして語るようになり、どんどん生き活きとしてくるそうです。これを先生は「自分が主人公になる」とおっしゃいました。支援や奉仕をする際、このことは非常に大切だとおっしゃっていたのが印象的でした。

また、人が生き活きとするためには、人間関係（特に家族との人間関係）を回復することが非常に重要だというお話もありました。自らのがんの発症を契機に 40 年ぶりに弟と再会した方が「弟と再会できたので、がんになってよかった」とおっしゃったというエピソードも非常に心に残りました。以前、ホスピスケアに携わる方が講演の中で、「末期がんの方が、家族との人間関係を回復されたことで安らかに最後を迎えることができた」と語っていたのを思い出しました。

講演中、ハンカチで目頭をおさえている姿がたくさん見受けられました。厳しい環境に本気で向き合っている実践者のお話は説得力があり、聴く者の胸に多くの言葉が届くのを実感しました。これからも、こういった実践者の講演をお届けしたいと思います。